



特定非営利活動法人アイキャン

2025年度 事業報告書

(2025年5月～2026年4月)

～人々の「ために」ではなく、人々と「ともに」～

Not “for” the people, but “with” the people

アイキャンは、一人ひとりの「できること（ICAN）」を持ち寄ってよりよい社会をつくろうと、たった一人の会社員から始まった国際協力NGOです。

ビジョン（目指す社会）

誰もがもてる力を発揮し、未来を切り拓くことができる社会

ミッション（果たすべき役割）

- 1、多様な背景を持つ人々の声に耳を傾け、誰もが自らの可能性と社会が抱える課題に気づく機会をつくれます
- 2、その気づきを育て共有することで、課題解決に取り組む力を伸ばします
- 3、その力を持ち寄りつなぐことで、望む未来をともに目指します

行動指針

人々の「ために」ではなく、人々と「ともに」。Not “for” the People, but “with” the People.

活動のお礼とご挨拶

「ともに」を体現する団体へ

日頃より、アイキャンの活動に温かいご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。

今年度は、アイキャンが大切にしてきた「人々の『ために』」ではなく、『ともに』という理念を、現場での実践としてより具体化していく一年となりました。

フィリピンでは、元路上の若者たちで構成されるグループ「カリエ」が、次世代の若者リーダーを育て、行政や関係機関と連携して、路上の子どもたちの課題に取り組む共同体の結成や政策提言を進めました。日本でも、外国にルーツを持つ人々の相談対応や学習支援などの直接的な関わりに加え、外国人当事者団体の設立や組織基盤強化における伴走支援、そして地域の中で課題解決に取り組む担い手の育成を進めてきました。

アイキャンが目指しているのは、支援を届けることだけではありません。困難に直面している本人や、その身近にいる人たちが、自ら声を上げ、仲間を集め、地域の中に課題解決の仕組みをつくっていくことです。支援の受け手だった人が、誰かを支える人になり、やがて地域を変える担い手へと変わっていく。その変化をともに歩むことが、これからのアイキャンの大切な役割だと思っています。

これからも私たちは、「ともに」歩む姿勢を大切にしながら、誰もが力を発揮できる社会を目指して取り組んでまいります。引き続き、応援とご協力をよろしくお願いいたします。

事務局長 福田 浩之



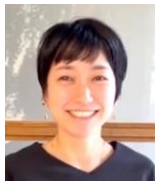
SDGs*の達成を目指しています



*SDGs：Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）…地球規模の課題に対し、2030年までに達成するべきとして国連が掲げる17の目標

スタッフ紹介

◆日本事務局



吉田 文



藤目 春子



長谷川 薫



庭田 美環



天羽 由実子



John Chris Velarde

◆フィリピン事務所



Joan Javier



Mariditha Mondares



Gracilda V. Villamor



Roberto O. Roxas

パートナー紹介

◆「子どもの家」を運営する現地スタッフ



Marites E. Cangao



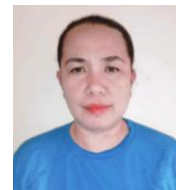
Riza May Colo



Renato S. Talle



Jonelyn P. Jamandre



Mary Jane G. Pacion



Jonel Tambologan



Rica B. Deblois



Lhoren Jimenez

Jonel、Rica、Lhorenは、カリエ*（P9・12参照）のメンバーとしても活動しています！

*カリエ：かつて路上生活をしていた若者で構成される組織。パンや菓子の製造販売、路上の子どもへの教育活動、アドボカシー活動等を実施。

役員一覧 ※順不同

- 代表理事** 鈴木 真帆（正看護師／公衆衛生学修士／特定非営利活動法人アイキャン前事務局長代理）
- 副代表理事** 龍田 成人（創設者／工学博士／特定非営利活動法人アイキャン元代表理事）
- 理事** 宮脇 聡史（大阪大学大学院人文学研究科教授／文学博士）
- 檜木 隆彦（田園社会イニシアティブ株式会社 代表取締役／美濃加茂市SDGs推進協議会アドバイザー）
- 稲葉 久之（フリーランス・ファシリテーター）
- 松浦 宏二（認定NPO法人チャイルド・ファンド・ジャパン理事／アイキャン元海外駐在員）
- 林 雅樹（ITコンサルタント）
- 阿部 真奈（アイキャン元海外駐在員）
- 福田 浩之（アイキャン事務局長、金城学院大学非常勤講師）
- 監事** 林 俊彰（税理士）

パートナーの皆さま（2025年度 会員・寄付）

【会員】 正会員 18名、賛助会員 47名

【寄付】 43法人・団体、個人 1,621名（一般寄付者 586名、街頭募金寄付者 449名、物品収集寄付者 586名）

寄付による法人・団体のパートナーの皆さま *五十音順、敬称略

- 【ア行】 愛知美術研究所、NPO法人アスクネット、荒川会計事務所、イオンリテール株式会社、株式会社エコリング、株式会社MIMモデル、オートサービスながわ、Orange Rainbow
- 【カ行】 かみひとねっとわーく京都事務局、株式会社カモン、Canva Foundation、株式会社グラント、神戸市教育委員会事務局、国土館大学
- 【サ行】 採用商店株式会社、三承工業株式会社、ジーアセットプランニング株式会社、有限会社ショウテック、白井茶園、Sumitronics Phils., Inc.、生活協同組合コープあいち、聖霊中学高等学校、有限会社禅コーポレーション、ソフトバンクグループ株式会社
- 【タ行】 地球愛祭り in 京都実行委員会、地球愛祭り静岡実行委員会、豊盛工機工業有限会社、株式会社Travelish
- 【ナ行】 長野県上田高等学校、特定非営利活動法人名古屋NGOセンター、名古屋市立北高等学校、名古屋市立名東高等学校、Narida Auto Parts, Corp.、有限会社西岬種苗、日蓮宗本正寺
- 【ハ行】 ブックオフコーポレーション株式会社、Polytechnic University of the Philippines
- 【マ行】 株式会社ミュール、メナードフェイシャルサロン知立桜馬場
- 【ヤ行】 安井鋳金株式会社、株式会社矢田工業所、矢作コンクリート工業株式会社
- 【ラ行】 株式会社レ・ヴァン

*個人のパートナーの皆さまにつきましては、個人情報保護の観点から、氏名の記載は割愛させていただきます。

参加ネットワーク

- 【正会員】 日本NPO学会
日本地域福祉学会
(特活) 国際協力NGOセンター(JANIC) … 全国規模のネットワークNGO
(特活) 名古屋NGOセンター … 中部地域のネットワークNGO
- 【賛助会員】 (特活) ジャパン・プラットフォーム … 緊急救援のネットワークNGO
- 【その他】 孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム

メディア掲載（19件）

毎日新聞 5件、中日新聞 7件、岐阜新聞 3件、
朝日新聞 3件、マニラ新聞 1件



助成事業

団体・機関名・助成金名	事業名・事業内容
真如苑	路上の若者グループ「カリエ」による、フィリピンの路上の子どもの課題の抜本的解決に向けた挑戦（フェーズ2）（1年次：2025年2月～2026年1月）（2年次：2026年2月～2027年1月）
公益財団法人風に立つライオン基金	フィリピンの路上の子どもの予防と早期介入の拡大展開期（2025年4月～2026年3月）
社会福祉法人中央共同募金会	岐阜県美濃加茂市の外国にルーツがある人々への課題提起型の日本語学習拠点の整備・運営事業（2024年10月～2025年9月）
社会福祉法人中央共同募金会	住民主体の多文化共生地域福祉の推進と先進的な事例を波及させる手法開発のための実践研究（2年目：2025年4月～2026年3月）
公益財団法人ベネッセこども基金	地域連携による外国にルーツを持つ就学前の子どもの日本語・母語の教育環境整備事業（2025年4月～2026年3月）
公益財団法人日本フィランソロピック財団（ソーシャル・グッド基金）	外国ルーツの若者への居場所の提供を通じたエンパワメント事業（2025年4月～2026年3月）
日本郵便年賀寄付金助成金	技能実習生等の居場所づくりと多文化理解交流会への展開（2025年4月～2026年3月）
公益財団法人ウェスレー財団	岐阜県可児市における外国ルーツの若者主体の居場所づくりと地域交流促進事業（2026年4月～2027年3月）
公益財団法人国際文化フォーラム	多言語表現活動でひらく未来―外国ルーツ中高生のキャリア教育モデル構築事業（2026年4月～2027年3月）

補助金

団体・機関名	事業名・事業内容
岐阜県総合企画部SDGs推進課	フィリピン貧困地域の人々の写真展およびSDGs宣言コーナーの設置（2025年8月～2026年2月）

受託事業

団体・機関名	事業名・事業内容
特定非営利活動法人ぎふNP0センター	女性のつながりサポート事業（2025年4月～2026年3月）（2026年4月～2027年3月）
美濃加茂市まちづくり課	在住外国人キャリア教育業務（外国籍の保護者対象セミナー）（2025年4月～2026年3月）
美濃加茂市福祉課	多様な支援を重ね合うための対話の場づくり事業（2025年7月～2026年3月）
特定非営利活動法人ブリッジ	美濃加茂市在住外国人の生活相談事業、及び多文化交流事業等（2025年4月～2026年3月）
どまんなか協同組合	外国人労働者受入に係る業務（2025年6月～2026年5月）
株式会社オルタナティブツアー	現地コーディネート：スタディツアー4件、大学研修5件、事業地訪問5件（2025年5月～2026年4月）

JICA基金	伴走支援：多文化共生リソースセンター東海「在日ネパール人第二世代等のための名古屋ネパール語教室の運営支援」（2025年11月～2026年10月）
JICA基金	伴走支援：Anya's「レイテ島における地域循環型就労支援プロジェクト」（2026年2月～2027年1月）

会議の開催

1. 総会

1. 日時：2025年7月26日（土） 開会 午前10時05分 閉会 午前11時09分
2. 場所：名古屋市東区代官町39-18 日本陶磁器センタービル5階 中部リサイクル運動市民の会内 及びオンライン
3. 審議事項：2024年度事業報告書、2024年度計算書類等、2025年度事業計画書、2025年度活動予算書、役員改選

2. 理事会

第1回理事会

1. 日時：2025年5月29日（木）20:00～20:50
2. 場所：オンライン
3. 議案：2025年度第一四半期見込みと年度計画、2024年度決算報告、2025年度事業計画ワークショップのフィードバック、次期理事会体制について

第2回理事会

1. 日時：2025年5月29日（木）20:50～22:00
2. 場所：オンライン
3. 議案：特別代理人の選任について

第3回理事会

1. 日時：2025年7月17日（木）20:00～21:15
2. 場所：オンライン
3. 議案：2024年度事業報告書、2024年度計算書類等、2025年度事業計画書、2025年度活動予算書、役員改選について、セーフガーディングポリシー制定について

第4回理事会

1. 日時：2025年7月26日（土）11:13～11:40
2. 場所：オンライン
3. 議案：代表理事／副代表理事の互選について

第5回理事会

1. 日時：2025年11月4日（火）20:00～21:42
2. 場所：オンライン
3. 議案：DSWDライセンス更新に係る職員への権限付与について、2025年度予算立案と執行状況、及び資金繰り報告、Webリニューアルオープン、夏募金の結果および冬募金の開始・協力要請、中部プロボノ結果と目標管理の開始、フィリピン事業計画、セーフガーディングポリシー立案、ツアー実施状況と今後の見込み報告

第6回理事会

1. 日時：2026年3月9日（月）19:00～20:30
2. 場所：オンライン
3. 議案：今後の理事会体制について、セーフガーディングに関連して（コンプライアンス規程、内部通報規程）、フィリピン決算報告業務、理事の貸付金を含めた決算予測、事業進捗共有

27 件の講演・事務所訪問受け入れ

小学校～大学までの教育機関やNPO法人、日本赤十字社愛知県支部、岐阜県社会保険労務士会等において、計27件の出張授業/講演会、事務所訪問受け入れを行い、約1,080名を対象に講演を実施しました。フィリピンでの路上の子どもとの活動や日本での多文化共生事業、国際協力分野におけるキャリア形成をテーマにした講演のほか、病院関係者への「やさしい日本語」に関する講演も行いました。



14 件の自主イベントを開催

対面またはオンラインでのイベントを14件開催しました。児童養護施設「子どもの家」の設立10周年を機に開催したオンラインイベントでは、かつて路上生活をしていた子ども・若者たちが、アイキャンの活動を通じた自分自身の変化について、日本側の参加者に伝えました。対面のイベントでは、写真展（池田町）や多文化共生シンポジウム（美濃加茂市）、活動説明会（名古屋市）などを行いました。



130 名が参加

公募型のスタディツアーを8月と3月に開催したほか、高等学校や大学等のオリジナル研修、事業地訪問等を合計11回開催しました。今年は、フィリピン高校生の日本研修のコーディネートも行い、計130名が参加しました。



6 つのイベントに参加

延べ15名のボランティアの方にご協力いただき、6つのイベントでフェアトレード商品（フィリピン最大のごみ処分場があった地域の女性たちによる手作りのぬいぐるみや雑貨）を販売したり、フィリピン文化を紹介したりしました。



<その他>

◆日系フィリピン人が多く暮らす岐阜県美濃加茂市・可児市とのつながりから、出身地の一つであるダバオを訪問し、ミンダナオ国際大学と意見交換を行いました。日系フィリピン人が日本で直面する教育・福祉・就労等の課題を共有し、大学の教育学部・介護福祉学部との今後の連携の可能性について協議しました。

特集：事業地訪問・スタディツアー・海外研修

アイキャンでは、フィリピンの人々・子どもたちが抱えている課題を学び、解決に向けて行動していく人を増やすことを目的に、スタディツアーや海外研修の企画・実施・受け入れをしています。参加者は、アイキャンの活動地であるパヤタスごみ処分場や、マニラ首都圏の路上の子どもが多く暮らす地域を訪問し、住民や子どもたちと交流をしながら、世界規模の課題を知り、自分事として考え、そして自分にできることを行動に移していきます。2025年度は、一般募集のスタディツアーの他、大学や高校からのオーダーメイドの研修、またフィリピンの若者たちの日本研修も実施しました。



<参加者の声>

実際にフィリピンに来て、今ここで起こっている問題が他人事ではなくなりました。どのフィリピンの人たちの笑顔もステキで、でもその笑顔の奥も見ることができた気がしました。自分に何ができるのかは、ずっと考えています。まずこの現実を忘れないこと、また寄り添いながら、話を聞いて知ろうとする努力を続けることが大切だと思っています。「私にも何かできるかもしれない」—この気持ちを持ちつづけて、私に関わる社会が少しでも良くなるよう、これからも生活していきたいです。（Hさん）



人間はどこまでも強いんだ、ということをこのツアーを通して感じました。過酷な背景を持っているけど、常に優しくて温かくて、他人のことを思って行動している人たちばかり。一日一日があっという間に過ぎていきました。帰国後に私ができることは、職場でできるだけ声を上げることだと思っています。会社という組織を動かして、何か大きなものにしたいです。ツアーに参加して、「何もできない自分」から、「何かできるかもしれない」という希望を持つことができました。（Rさん）



3 名の子どもが家族と再統合（フィリピン）

児童養護施設「子どもの家」で、子ども一人ひとりの課題を把握し、自立に向けたサポート計画を立てるため、毎月の相談会議と四半期ごとのケア会議を行いました。子ども本人の思いや家庭の状況を確認しながら、家族との関係調整や生活環境の確認を進めた結果、3名の子どもが家族との再統合に至りました。再統合後も、子どもたちが安心して家庭生活を続けられるよう、必要に応じて状況確認やフォローアップを行いました。



24 名の次世代リーダーへの研修を実施（フィリピン）

かつて路上で生活していた若者で構成される団体「カリエ」の新たな担い手を育成するため、次世代リーダー候補24名を対象に、パン作り、衛生管理、商品開発、OJT等の新人研修を8回実施しました。研修では「カリエ」のメンバー自身が講師となり、技術だけでなく、仕事への向き合い方や課題を自分たちで改善する姿勢を伝えました。また、専門家によるマーケティング研修を4回実施し、商品の付加価値、顧客分析、販売促進等について学びました。その結果、高校での委託販売や販売促進用資料の作成、移動販売での活用など、具体的な販売活動につながりました。



延べ500 名の路上の子どもを対象に教育活動を実施（フィリピン）

「カリエ」及び若者リーダーが、7地域の路上の子ども延べ約500名に路上教育を25回行いました。路上教育では、かつて路上で生活していた若者がロールモデルとして関わり、子どもたちが自分の将来や可能性について考える機会をつくりました。また、若者リーダー自身にとっても、地域の子どもたちの課題に向き合い、支える側として行動する経験となりました。



延べ1,003 名の若者に居場所を提供（日本）

岐阜県可児市において、若者が安心して過ごせる夜間の居場所「チルカフェ」を39回開所し、延べ1,003名の若者が参加しました。食事や飲み物、生活必需品を提供しながら、若者が友人や地域の大人と自然に話せる場をつくりました。参加者の約8割は継続的に参加しており、学校や家庭以外に安心して過ごせる場所を地域の中に設けることができました。



3つの若者主体プロジェクトを実施（日本）

「チルカフェ」で過ごす若者たちの「やってみたい」という思いを起点に、音楽ライブ、若者議会、スポーツ大会を実施しました。若者たちは参加者として関わるだけでなく、企画内容の検討、広報、当日の準備・運営、進行補助、片付け等の役割を担い、主体的に活動を進める姿が見られました。



延べ441名が日本語教室に参加（日本）

岐阜県美濃加茂市において、外国にルーツを持つ子どもが、地域で生活する中で必要な日本語を学ぶ「アイキャンこどもの居場所」を整備・運営しました。週1回の学習支援に加え、夏休みにはサマースクールも実施し、延べ441名が参加しました。学校、市の福祉課、子ども相談センター等から支援が必要な子どもが紹介されるなど、行政・教育機関との連携拠点としても機能しました。



3回の地域交流イベントを実施（日本）

日本語学習を言葉の習得に留めず、地域とつながる学びに広げるため、美濃加茂市において地域交流イベントを3回実施しました。具体的には、外国にルーツを持つ子ども、保護者、地域住民がともに地域を歩き、写真やスケッチを通して「気になる風景」や感じたことを共有する機会を持ちました。また、学習者の中から「地域住民ともっと交流したい」「自分たちの文化を紹介したい」という声が生まれ、カヌー体験やクリスマス会などの地域交流イベントの企画・運営にも発展しました。



3名のインターン受け入れ（フィリピン）

フィリピン事務所で3名のインターンを受け入れました。児童養護施設「子どもの家」で子どもたちが季節や日本文化を体験できるような課外活動を考案、実施したり、日本語学習のための教科書を作成し、子どもたちが楽しく日本語を学べるような講座を行ったりしました。



<その他>

- ◆2025年度に実施を予定していたフィリピンでの食行動改善活動については、助成金側の事業方針および実施条件の変更により、当年度は実施しないこととなりました。
- ◆フェアトレード生産者団体SPNPメンバーに対して、マーケティングや事業承継に関する相談対応を行いました。

特集：「居場所」から、「自分もできる」へ

外国にルーツを持つ若者の中には、言葉の壁、進路への不安、家庭の経済的困難、親子間の文化的なギャップなどを背景に、学校や家庭の中で安心して自分を出せる場を持ちにくい若者がいます。若者が安心して過ごし、信頼できる大人や仲間と出会える「居場所」は、自分の思いや可能性に気づき、次の一步を踏み出すための大切な入口となります。

こうした考えのもと、外国ルーツの若者が夜間に多く集まる岐阜県可児市の駅付近で、若者が自由に過ごせる夜間の居場所「チルカフェ」をつくりました。そこでは、何かを相談することを前提にするのではなく、食べる、話す、ゲームをする、友人と過ごすといった日常的な関わりを大切にしています。何気ない会話を重ねる中で、学校生活、家庭環境、進路、生活上の困りごとなどが少しずつ見えてきます。相談窓口自分から行くことが難しい若者にとって、チルカフェは支援につながるための入口にもなっています。



今年度は、チルカフェでの関わりを通じて、必要に応じて関係機関につなぐケースも生まれました。ただし、チルカフェが目指しているのは、困りごとを抱えた若者を支援につなぐことだけではありません。若者が「ここにいていい」と感じられること、自分の話を聞いてくれる大人がいること、そして「自分にも何かできることがある」と信じられることを大切にしています。また、支援する側・される側という関係に固定せず、若者自身が場をつくる一員になっていくことを重視しました。



その中から、若者の「やってみたい」という思いを起点に、音楽ライブ、若者議会、スポーツ大会などの活動が生まれました。若者は単なる参加者ではなく、企画内容を考えたり、広報を手伝ったり、当日の準備や運営を担ったりしました。音楽ライブでは、チルカフェにギターを持ってきた若者への声かけをきっかけに、本人が演奏曲を選び、友人に司会を依頼するなど、主体的に準備を進める姿が見られました。自分の好きなことや得意なことが、地域の中で誰かに届く経験は、若者にとって大きな自信につながりました。



チルカフェの運営には、アイキャンがフィリピンで長年大切にしてきた実践も活かされています。それは、子どもや若者を「支援の対象」として見るのではなく、経験や力を持った存在として関わる姿勢です。安心できる関係の中で、若者自身の声を聞き、本人の関心や得意なことを出発点にしながら、少しずつ役割や挑戦の機会をつくっていく。この考え方は、チルカフェにおいても大切にしている関わり方です。

地域の中に安心していられる居場所があるからこそ、若者は自分の思いを話し、仲間と出会い、新しいことに挑戦できます。そして、小さな役割を担う経験を重ねることで、「自分にもできることがある」という感覚が育っていきます。チルカフェは、外国にルーツを持つ若者が地域の中で孤立せず、自分らしく過ごしながらか、次の一步を踏み出すための場となっています。

23 名の若者が関係者会議に向けた意見を整理（フィリピン）

「カリエ」のメンバーと、2023年度及び2024年度に「カリエ」によるリーダー研修を受けた7地域の23名の若者リーダーによる会議を実施しました。会議では、各地域で路上の子どもたちが直面している課題や、若者リーダーが実施してきた路上教育の成果・課題を共有しました。その上で、行政、警察、NGO等が参加する関係者会議において、若者自身が何を伝えるべきかを話し合い、当事者の視点から課題を整理しました。



12 機関と連携し、85名の関係者とともに「共同体」を結成（フィリピン）

路上の子どもの課題解決に向けて、「カリエ」を中心に、行政、警察、NGO、企業等の12機関と連携し、関係者会議を4回開催しました。会議には延べ85名が参加し、若者リーダーや「カリエ」のメンバーが、自らの経験や地域で見えている課題を発表しました。そして、路上の子どもたちが直面する課題を、個人や家庭だけの問題ではなく、貧困、教育機会、家族関係、地域の安全、社会保障制度の不足などが重なった構造的な課題として共有しました。若者の声を起点に、子どもが路上に押し出されることを防ぐ「予防」と、すでに路上で生活している子どもへの「早期介入」を共通目標として確認し、支援のあり方や制度の見直しにつなげるための「共同体」を結成しました。



1,613 名からの未投函ハガキ・未使用切手の寄付（日本）

毎年、未投函ハガキや未使用切手等の収集に協力してくださるコープあいち様を通じて、1,613名の組合員様からご寄付をいただきました。また、ブックオフコーポレーションと連携した古本等の収集活動「キモチと。」では、キャンペーン期間中に月30件を超えるご寄付をお寄せいただき、年間で99件（22.9万円）のご寄付となりました。



延べ160 名の街頭募金ボランティア（日本）

計94名（延べ160名）のボランティアの参加を得て、街頭募金を9回実施し、通行人449名からご寄付をいただきました。参加者一人ひとりが自分に「できること」を考えてチラシ配りや呼びかけの仕方を工夫し、周りの方から「頑張って！」などの温かいお言葉もたくさんかけていただきました。



延べ181名の事務所ボランティア（日本）

49名（延べ181名）の方が平均3.7回参加し、ご寄付として届いた未投函ハガキや未使用切手等の仕分け・カウント作業にご協力いただきました。



延べ203名の行政・福祉専門職等の能力強化を実施（日本）

外国人支援に対応できる福祉専門職や、多様な住民の主体形成・組織化ができるコーディネーターを育成するため、多文化共生地域福祉、オープンダイアログ、コミュニティ・オーガナイズ、地域づくり、先進事例の視察等を計7回実施し、延べ203名が参加しました。参加者の中からは、居場所づくりや地域活動を新たに立ち上げる動き、既存の取り組みをネットワーク化する実践も生まれました。



延べ1,056名の生活環境の改善に貢献（日本）

28組織と連携し、延べ1,056名の生活環境の改善に関わりました。生活相談を通じて、在留資格、医療・健康保険、子どもの教育、生活困窮、就労、家族関係などの相談に対応し、市役所、医療機関等の関係機関につなぎました。地域づくり活動では、行政、福祉専門職、外国人コミュニティ、企業等との連携を進め、外国にルーツを持つ人々を地域の中で支える体制づくりを行いました。地域での役割づくりの活動では、外国籍住民を中心とするグループに対して、団体の立ち上げ、事業の案件化、組織基盤の強化、助成金の獲得に向けた伴走支援を行いました。

延べ335名の保護者と教育関係者に学びの機会を提供（日本）

外国ルーツの子どもの就学前からの学びを支えるため、保護者向けワークショップ、行政・教育関係者向け研修、関係者会議等を9回実施し、延べ335名が参加しました。保護者には、日本の教育制度や家庭内の言語環境、母語教育の重要性について伝えました。行政・教育関係者には、外国ルーツの子どもが直面する言語・学習・アイデンティティの課題を共有し、地域で支える仕組みづくりを進めました。



17名の多言語・多文化のこども応援サポーターが誕生

外国ルーツの子どもの学びと言葉の課題に対応するため、日本語・母語教育の担い手研修を12回実施し、17名が受講しました。研修では、外国ルーツの子どもが直面しやすいダブルリミテッドの課題や、母語を大切にしながら日本語を育てることの重要性について学びました。受講者は、多言語・多文化の背景を持つ子どもたちの学びを地域で支える「こども応援サポーター」として、今後の学習支援や保護者との関わりに参加していく見込みです。



特集：路上で生活する子どもの課題に取り組む「共同体」の結成

子どもたちが路上での生活を余儀なくされるフィリピン社会の構造を改善するため、アイキャンは中期3か年計画を策定し、2023年度から取り組んでいます。これにより、現地政府、企業、NGOが垣根を超えて協働し、子どもたちが路上に押し出されないための予防策と、路上で生活する子どもへの早期介入を行う体制をつくることを目指しています。3年目となる今年度は、路上の子どもの課題に取り組む「共同体」を結成するため、「関係者会議」を4回開催しました。

①課題と目標の共有（第1回・第2回）

若者リーダーによる発表を通じ、路上の子どもたちの現状や背景にある社会課題を参加者と共有しました。その上で、予防と早期介入を共通目標とすることを確認しました。会議を重ねるにつれて、路上の子ども・若者にとって「自分たちを取り締まる敵のような存在」だった行政や警察が、同じ目標に向かう「パートナー」としての関係性へと変化していきました。



②協働の方向性を模索（第3回）

行政や警察に加え、第3回からは他のNGOも参加し、各団体が有する資源や強みを共有して協働の方向性を検討しました。具体的には、路上教育の実施、各地域での情報共有、行政やNGOとの連携強化などが協働活動として位置づけられました。さらに、「カリエ」に対し「自分たちの地域でも路上教育をしてほしい」との要請があり、会議後に実現しました。



③「共同体」としての誓い（第4回）

会議終了後も参加者一人ひとりが「自分事」として路上の子どもの課題に取り組む意識を維持してもらうため、課題に対する「よりよい結末」をつくる参加型の劇を取り入れました。参加者からは「自分自身が課題の一部であると同時に解決を担う一人でもある」と再認識したなどの声がありました。最後に「共同体」としての誓いの言葉が交わされ、路上の子どもの課題に対する連携の枠組みが明文化されました。



～「関係者会議」の舞台裏～

関係者会議を中心的に担う「カリエ」のメンバーと若者リーダーたちは、事前合宿等を通して入念に準備をしました。最後の会議で参加者に特に伝えたいこととして、路上の子どもの課題は「路上の子ども個人の問題」ではなく、貧困、家庭環境、教育機会、社会保障制度の不足などが複合的に関係する「社会構造上の課題」であることが挙げられました。そのため会議で登壇する若者リーダーたちは、地域社会が何に取り組むべきかを自身の視点から訴えることにしました。この準備過程を通じて、若者リーダーの課題分析力、表現力、発信力が向上し、会議における対話の質を高める土台が形成されました。路上の子ども・若者は「支援される側」ではなく、課題を社会に提起し、解決に向けた協働を呼びかける主体としての役割を果たしました。



特集：支援の受け手から、地域を変える担い手へ

国内の外国にルーツを持つ子ども・若者の課題も、フィリピンの路上で生活する子どもの課題も、背景には教育、福祉、家庭、労働、貧困、言葉の壁、地域のつながりの弱さなど、複数の要因が重なっています。困っている人に支援を届けることはもちろん重要ですが、それだけでは課題の構造そのものは変わりません。そのためアイキャンは、直接的な介入に加えて、関係者・団体、行政、企業、当事者コミュニティをつなぎ、それぞれの「できること」を持ち寄る仕組みづくりに取り組んでいます。

外国籍住民の割合が約10%に達する岐阜県美濃加茂市・可児市においては、行政職員、福祉専門職、市民団体、外国籍住民、地域住民を対象に、研修やワークショップ、視察を実施し、多文化共生を担う人材の育成を進めました。研修では、外国にルーツを持つ人々の生活課題を、本人の努力や文化の違いだけに帰すのではなく、制度、言語、教育、就労、家族関係、地域社会とのつながりなどが重なり合って生じる課題として捉える視点を共有しました。また、課題の近くにいる人たちの声を出発点に、仲間を集め、地域の中で具体的な行動につなげていく方法を学びました。



こうした取り組みの中から、地域の中で具体的な課題に取り組む「共同体」の形成が進みました。例えば、ブラジルにルーツを持つ住民を中心に立ち上がった「ラポール翼」は、生活相談やメンタルサポート、通訳支援などを通じて、地域で孤立しやすいブラジルルーツの人々を支える活動を進めています。また、フィリピンにルーツを持つ住民による「ディワ外国人コミュニティ」は、外国籍の保護者の居場所づくりや、日本の制度や文化を学ぶ場づくり、日本語学習機会の提供などを通じて、外国籍住民と地域社会をつなぐ役割を担っています。



それぞれの「共同体」は、生活相談、子どもの学び、若者のキャリア支援、居場所づくり、通訳、地域交流など、異なるテーマに取り組みながらも、地域の中で孤立しやすい人々を支える共通の役割を持っています。特に、外国人コミュニティが自分たちの経験や言語能力、人とのつながりを活かし、相談対応や通訳、学校・福祉課との連携に関わるようになったことは、大きな変化です。支援を受ける側に留まらず、地域の課題解決を担う主体として動き始めています。



日本でもフィリピンでも、アイキャンが目指しているのは、支援を届けることだけではありません。課題の近くにいる人たちが、自ら声を上げ、仲間を集め、行政や企業、専門機関とつながりながら、地域の中で解決の仕組みをつくっていくことです。誰かが一方的に助けるのではなく、それぞれが持っている経験、言葉、専門性、人脈、場所、資金、思いを持ち寄ることで、地域の中に新しい動きが生まれます。支援の受け手だった人が、誰かを支える人になり、やがて地域を変える担い手へと変わっていく。その変化を支えることが、アイキャンの大切な役割だと思っています。

岐阜出張所（池田町）での活動

岐阜県揖斐郡池田町の岐阜出張所(池田町)では、「世界とつながる場」「想いが集う場」「できることを実践する場」「新しいものを生み出す場」を目指し、以下の活動を実施しました。

①居場所事業

前年度に拡張した出張所を、小学生や中学生などの生徒および、小さなお子様連れの方やご高齢の方、地域に暮らす外国籍の方等が自由に、気軽に集うことができる「居場所」として運営しました。また、地域活動の活性化を目的に、地域ギター教室、ワークショップ、地域活動（サロン）の場としても活用いただけるようにし、24回の地域活動が開催されました。



②多文化共生社会づくり

地域の団体・企業と連携し、入国間もない外国籍の方への日本語教育、生活に必要な銀行口座開設、マイナンバーカード作成等の補助を行いました。また今後、外国籍の方を雇用する法人に対し、異文化理解およびやさしい日本語セミナー等を実施しました。その他、外国籍住民と近隣の中学校・高校を訪問し異文化交流を行ったり、フィリピンの高校生の研修旅行を受け入れるなどしました。フィリピンの高校生研修では、7名のフィリピン人高校生とともに、池田町の中学校・高校を訪問して文化交流やスポーツ交流等をしたほか、地域の方との日本文化交流を行いました。



③岐阜県女性のつながりサポート支援事業

ぎふNP0センターからの受託で、様々な課題を抱える女性のサポート事業（居場所提供、サポート機関のご紹介、生理用品の配布等）を実施しました。222名の方が利用されました。

広報・ブランディング、ファンドレイジング、組織体制の強化

①広報・ブランディング

2025年度は、ホームページをリニューアルし、スマートフォンからも閲覧しやすい構成にしたほか、「寄付する」ボタンを常に表示し、寄付への導線を強化しました。サイト閲覧者からは「見やすくなった」「想いがまっすぐ伝わってきた」などの声を頂きました。

年間を通して毎月メール配信するマンスリーレポートは、件名とプリヘッダーを毎月工夫した結果、平均開封率は前年度の31.3%を大きく上回る38.6%となりました。

SNSにおいては、インスタグラムとフェイスブックの投稿頻度と内容の質を改善しました。その結果、年間でフォロワー数はインスタグラムで253人、フェイスブックで72人増加しました。

②ファンドレイジング

資金調達のあり方をビジョン・ミッションと一貫させ、共感と参加を促すファンドレイジング戦略を構築・実行するため、日本ファンドレイジング協会の認定ファンドレイザーによる研修（主催：ベネッセこども基金）を受講しました。研修を通じて、寄付を単なる資金提供として捉えるのではなく、活動に共感し、ともに社会課題の解決に参加していただく関係づくりとして位置づけることの重要性を学びました。日頃から寄付者や支援者との接点を大切にし、活動の成果だけでなく、現場で生まれた小さな変化や嬉しかった出来事を何気なく共有することで、アイキャンの活動をより身近に感じていただける発信を意識するようになりました。

また、クラウドファンディングを夏と冬の計2回実施し、いずれも目標金額を達成しました。前年度に続き今年度も、寄付サイトを運営するコングラント社による「GIVING100 by Yogibo」の対象プロジェクトとして承認され、寄付決済時に発生する決済手数料が無料となり、寄付金を全額活用することができました。

さらに、Yahoo!ネット募金に2件のプロジェクトを新規で掲載し、PayPayやVポイントによる寄付が可能になったことで、新規の寄付者を増やすことができました。

③組織体制の強化

一般社団法人Everybeingによる伴走支援を受け、セーフガーディングに関する指針と行動規範を作成しました。今後総会にて正会員の同意を得た後、ホームページで公開し、運用していきます。

また、限られた人員で質の高い事業運営を行うため、文章作成、翻訳、多言語対応、広報、資料作成等において、生成AIの活用を進めました。一方で、個人情報や支援対象者に関わる情報の取り扱いには注意するとともに、AIに過度に依存せず、人との対話や関係性を重視する方針を確認しました。

さらに、中部プロボノ協会による伴走支援を経て決定した職員の目標管理シートを導入し、上司・理事との定期面談を通じて目標に対する進捗の確認や助言を行いました。これにより、職員一人ひとりが自身の役割や担当業務の優先順位を確認しながら、日々の業務に取り組むことができるようになりました。

募集しています

マンスリーパートナー

マンスリーパートナーは、月々1,000円（1日33円）から一定額をご寄付いただき、アイキャンの活動および運営に活用させていただく制度です。継続的なご寄付は、活動の持続・発展において大きな力となります。ぜひマンスリーパートナーになって「ともに」活動してください！



↑詳しくはこちら



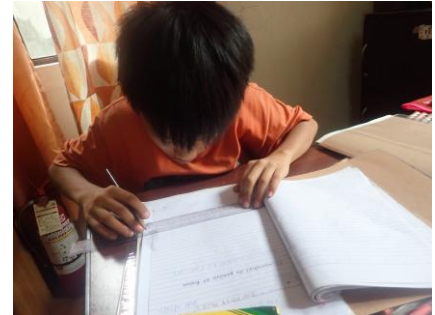
1,000円のご寄付で

例えば、6人の子どもの文房具一式を提供できます。



3,000円のご寄付で

例えば、約60人の子どもの「路上教育」をする材料費になります。



5,000円のご寄付で

例えば、児童養護施設の子どもの約半年間の通学費になります。

未投函ハガキ等



未投函の官製はがき、未使用切手、テレフォンカード、商品券、収入印紙がお手元にありますら、封筒に入れて、アイキャン日本事務局までご郵送ください。ハガキ1枚は、例えば、フィリピンの子どもの勉強するためのノート1冊分になります！



↑詳しくはこちら

リユース寄付（古本・DVD・ゲーム・おもちゃ等）



ブックオフコーポレーションと連携した、物品によるご寄付の形です。不要になった本や使わなくなったモノ等をブックオフに買い取っていただき、その買い取り額がアイキャンの活動に役立てられます。



↑詳しくはこちら



ホームページ



Facebook



Instagram

認定NPO法人アイキャン（ICAN）

【住所】

◆名古屋事務局

〒461-0002 愛知県名古屋市東区代官町39-18

日本陶磁器センタービル5F 中部リサイクル運動市民の会内

◆岐阜出張所（池田町）

〒503-2406 岐阜県揖斐郡池田町宮地515-2

◆岐阜出張所（美濃加茂市）

〒505-0041 岐阜県美濃加茂市太田町2542-10 太田パークビル3階

【TEL&FAX】 052-253-7299（休業日：日・月・祝）

【E-mail】 info@ican.or.jp

【WEBサイト】 <https://ican.or.jp/>

【Facebook】 <https://www.facebook.com/ICAN>

【Instagram】 ican_ngo